2024 年 10 月

気象と気象用語

松山地方気象台

【10 月の気象】

10 月の季語に「栗」「銀杏」「松茸」など食べ物の季語が多くあります。秋の空の様子を表す「鰯雲」「うろこ雲」という季語もあります。ところで、「鰯雲」と「うろこ雲」の違いはわかりますか。実は「鰯雲」「うろこ雲」ともに、高積雲または巻積雲という雲の別の呼び方で、ほかにも「ひつじ雲」とも呼ばれます。高積雲は、上空の高い所に小さな雲の塊が連なって見える雲です。

10 月の天気は周期的に変わり、移動性高気圧に覆われて秋晴れになることが多い月です。しかし、まだ台風の時期は終わっていません。9 月に比べると台風の発生数、接近数ともに少なくなりますが、四国地方への台風の接近数の平年値（1991 年～2020 年の平均値）は 0.4 個となっており、2、3 年に一度は四国地方へ接近することが考えられます。

台風の接近が TV 等で報道され始めたら、台風情報を積極的に入手し、早め早めの台風対策や避難を心がけてください。

図 1　高積雲

【気象用語】「温室効果ガスの観測」について

地球環境問題の深刻さが世界的に認識されるようになり、世界気象機関は 1989 年に全球大気監視計画を開始しました。この計画は、二酸化炭素などの温室効果ガスやオゾン等のように大気中に微量に存在する物質の濃度などを全世界で高精度に観測を行い、地球規模の大気環境の実態を把握し、変化を早期に検出するとともに、その情報を利用者に提供することを目的としています。

気象庁でも、この計画に基づき、様々な場所で、様々な観測を行い貢献しています。温室効果ガスの代表的な物質として二酸化炭素がありますが、国内では、社会活動の影響の少ない場所の綾里（岩手県大船渡市）、南鳥島（東京都小笠原村）、与那国島（沖縄県与那国町）で観測しています（与那国島は 2024 年 3 月で観測終了）。この 3 か所では、メタン、一酸化炭素等の温室効果ガスも観測しています。日本周辺の海洋中の二酸化炭素は、気象庁が保有する海洋気象観測船 2 隻（啓風丸、凌風丸）により観測を行っています。

国内 3 地点の二酸化炭素は年々増えているのが分かります（図 2）、観測を始めた当初は、350ppm 程度でしたが、近年は 420ppm を超えています。なお、図 2 を見てもらうと二酸化炭素は冬場に増え、夏場に減るという周期的に変化しています。これは、夏場は植物の活性が高くなり、二酸化炭素の吸収が多くなり二酸化炭素は減ります。一方、冬場は植物の活性が下がるため、二酸化炭素は増えることになります。

その他の温室効果ガスの詳しいデータは、気象庁 HP に掲載していますので、興味のある方はご覧ください。

気象庁 HP（温室効果ガス）：　https://www.data.jma.go.jp/ghg/info_ghg.html

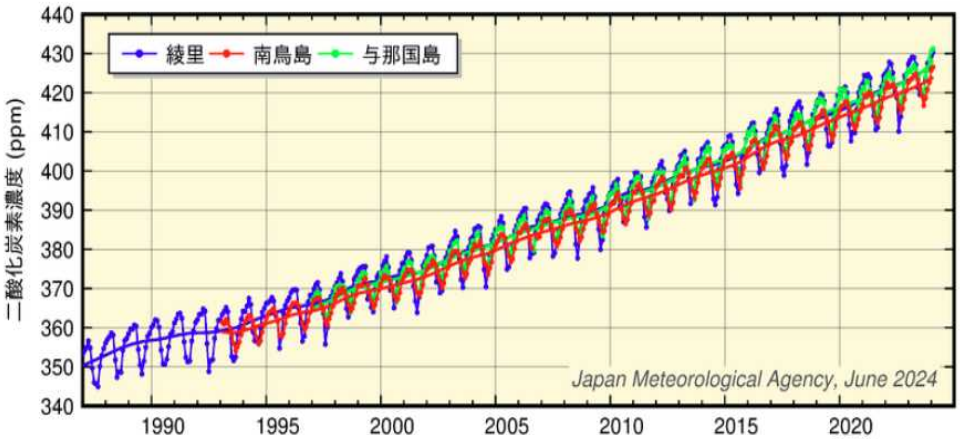

図 2　二酸化炭素濃度の経年変化（1987 年～2024 年 3 月）